

イネごま葉枯病に対する各種薬剤の種子消毒効果

富来 務・藤川 隆・佐藤俊次・安藤俊二
(大分県農業技術センター)

TOMIKU, T., FUJIKAWA, T., SATO, S. and ANDO, S.
Effect of Fungicides on Helminthosporium Leaf Spot of Rice Plant

近年とくに暖地では、イネごま葉枯病の穂に対する被害が問題となってきた。そこで1971～1974年に箱育苗の種子消毒につき実験を行なったので、その結果の概要を報告する。

実験1 本病に対する直接殺菌効果をみるため、培養接着種子を用い、1971年7月と、1972年6月に、23～24℃の薬液で6～24時間処理したのち、25℃の培地上で、本病原菌の生存を確かめたところ、水銀剤の効果が極めてたかかったのに対し、ベンレート、ベンレートT、トップジンM、7011、チウラミン各水和剤の実用濃度では無処理と大差なかった。

実験2 水稻朝日の罹病種子を用い、1972年9月に、乾燥種子のまま24～25℃の薬液に24時間浸漬処理し、水洗後さらに浸種、鳩胸状のときに苗箱(28cm×58×3)に200gあて播種し、ガラス室におき、約1ヵ月後に調

査した結果、発病率が無処理区の45.6%に対し、ベンレートT水和剤200倍26.3%、ベンレート水和剤500倍31.6%、チウラミン水和剤800倍47.4%であり、水銀剤の錠剤ルベロン2,000倍は14.1%であった。

実験3 2日間浸種した種粒を粉衣ならびに浸漬処理して直ちに苗箱に播種した。粉衣量は浸種後の種粒に対する重量比とした。その他は前実験に準じた。その結果は第1表のようであり、効果は一般にたかかった。粉衣量を検討した結果は、ベンレートT水和剤0.5%まで有効であったが、0.1%では極めて劣り、ベンレート水和剤は1%で有効、0.5%では同様に劣った。さらに1974年5月にレイホウの罹病種子を用いてタチガレンの効果を検討した結果は第2表のようであり、一般に効果は極めてたかかった。別に乾燥種子を粉衣後浸種して播種した場合は、いずれの薬剤も効果が劣った。

第1表 イネごま葉枯病に対する種子湿粉衣の効果(1972)

供試薬剤	調査事項	調査個体数(本)	ごま葉枯発病個体率(%)	立枯率(%)	草丈(cm)	葉害
1. ベンレートT水	(20倍液1分浸漬)	349	1.1	2.0	14.1	—
2. "	(1%種子湿粉衣)	362	1.4	1.7	12.2	—
3. ベンレート水	(")	361	0.8	6.1	15.3	—
4. チウラミン水	(")	324	5.2	1.2	9.2	+
5. タチガレン粉	(10% ")	233	1.7	3.0	14.6	+
6. "	(5% ")	309	3.9	4.5	15.0	±
7. 標準無処理		351	39.3	30.8	13.4	

第2表 イネごま葉枯病に対するタチガレンの効果(1974, 3区平均)

供試薬剤	調査事項	調査個体数(本)	ごま葉枯発病個体率(%)	生体重(g)	草丈(cm)	葉害
1. ベンレートT水	1%湿粉衣	472.7	25.7	46.3	12.1	—
2. タチガレン粉	1% "	456.7	2.4	42.3	13.4	—
3. "	3% "	463.0	7.1	42.7	13.6	—
4. "	5% "	457.3	0.9	42.3	13.4	—
5. "	液 500倍灌注	474.3	5.2	38.7	14.3	—
6. "	1,000 "	485.0	3.4	39.7	14.3	—
7. 標準無処理		484.3	40.1	43.7	12.0	

備考 粉衣量は乾燥種子重量比、灌注は1箱500ccあてとした。
立枯率は1.4～4.9%の間であったが省略した。

総括 ベンレートT水和剤20の、浸種後 0.5～1%の種子粉衣と、20倍液 1～5分浸漬で効果がたかく、同200倍液に乾燥種子15～24時間浸漬では若干劣った。ついでベンレート水和剤1%粉衣も有効であり、さらにタチガレン粉剤の1%粉衣ならびに種子消毒とは若干意味が異

なるが、同液剤 500～1,000倍液の1箱あたり500ccの播種直後の灌注は極めて有効であった。なお葉害の点から、粉衣量と濃度ならびに心枯線虫病に対するパダン水溶剤との混用その他については十分注意する必要がある。
(1975年1月7日稿)